

## 森町三倉「勉強会」

走る師匠 萩田さんは、そんなことを始めた。それは2016（平成28）年の春から始めた。私のメールボックスにそのメールが来る。

森町三倉「勉強会」 それは 人生を「学ぶ会」勉強会  
前々から

人間としての考え方、生き方、真理を伝えたい、いつしよに勉強したいと思っておりました。森信三先生が言っております。「人生二度なし」・・・と。素晴らしい今を、人生を生きるために、私といつしよに楽しく学びませんか、きつとこれからの生き方が楽になると思います。

そんな前文から始まり、日にち・場所・集合・スケジュール・参加人数・会費・持ち物、と続く。

それは、走る仲間の集まり・おしゃべり会・森町信三先生「修身教授録」の本を読む読書会、だった。

その勉強会はムーハウスで行われる、それはムーさんが造った山の奥の別荘、そこに集合するのだ。そのムーさんとは、私の城西小学校の先輩の人です。

9時15分

勉強会の準備をし、

9時30分から10時20分

第一部 近況報告 他・・・

10時30分

軽いギョギング

11時30分

シャワー、着替え

12時00分

食事

13時00分

第二部 勉強会

第三部 修身教授録 読書

15時00分

まとめ・感想（一言スピーチ）片付けく掃除

16時00分 解散

勉強会で使用する“修身教授録”の本を持ってない方は連絡ください。資料をコピーしてお渡しします。ピアゴ森町8時半に集合するか、森町三倉ムーハウスに直接行くか・・・も連絡ください。

呼掛け人 萩田 博

そのようなメールで、私は森町三倉「勉強会」に参加した。そこで森信三先生を知り、修身教授録という本の読書会が始まった。

修身教授録とは。森信三先生が師範学校の講師であった時（昭和12年〜13年）に、生徒に言った修身の講義を生徒に書き写させ一冊の本にしたものです。そ講義は森信三先生の修身に対する考えを伝えていきます。志・信念・人生・勤勉など、人として生きる原理原則が語られているのです。日本が戦争をする前の時の講義です。だいぶ前の話ですが、しかし、今を生きる自分だからこそ、その情熱と気迫が込められた、この森信三先生の講義は心にしみます。

修身とは。旧制中学校の科目のひとつ。道徳教育。自分の行いを正しくするようにつとめること。

森信三先生とは。1980（明治29）年から1992（平成4）年 日本の哲学者・教育者、理念ではなく実践において自己を修めることを述べた人である。

初めて森町三倉に行ったとき、そこは山の中だった。しかし、佐久間町より町には近いし。良いところだなあと感じました。その別荘は二階建てで、中央が吹き抜けで、二階のロフトにはオートレースのオートバイや競輪の自転車などが並べられている。聞けばオートレースや競輪の選手たちが、ここを合宿場として使用しているそう。うだ。そういえば部屋の片隅にある冷凍庫には凍った肉がぎっしり詰まっている。その選手たちは、ここに宿泊し、遠くは御前崎辺りまで自転車で走るのだと言っていた、肉も上等な肉を食べているそう。うだ。そういえば萩田さんと天竜辺りを走っていると自転車で乗った人から萩田さんに声をかけて来る人を見たことがある。ずいぶん顔の広い人だと、当時そのように思った。

そのムーハウスの中、そこで廻りに散らばっているテーブルを参加者みんなで集め、その中央に並べ、椅子も、そこに集めた。一人ひとり座る。私は萩田さんの目の前、萩田さんから見た左手の所に腰を下ろした。

私のすぐ左側には下さんが座った。前には瞳の小さな二橋さん、その隣には川島さん、奥の方には女性や若い人が数名腰かけていた。

萩田さんが言った。

「それでは、私から左回りに自己紹介をしてください」

え、ということは私が最初、何も考えてはいない、如何しよう。とりあえず適当に佐久間のことを。

「佐久間町から来ました。萩田さんからのメールでのお誘いでヨッシやるぞ、と思いやってきました。人間としての考え方、生き方、真理をとという所です。自分なりに考えていましたが、皆さんの考も参考にしたなと思、この会に申し込み、今ここにいます」と。言ったかなく(笑)

人間としての考え方、生き方、真理 「真理」とはいつどんなときにも変わることはない、正しい物事の筋道。と gooo 辞書には書いてある。「正しい物事」自分は正しい、そう思っても、他の人には正しくない。そういうこともある。いや、そういうことの方が多いのではないだろうか。

例えば、私は佐久間町で仕事をして定年退職をしたならば、その地域に恩返しをするのが正しい道だと思。しかし、そう思っていない人が多くいることを感じている。

そう感じているからこそ、このとき私は、この言葉 人間としての考え方、生き方、真理 この言葉でこの森町三倉に行ったのだと思。

しばしの雑談が終わり、集まった人たちは着替え、走りに出た。ムーハウスから坂道を上った。そこを上りきると一軒の店屋がある。そこは様々なものが売られている、地域で唯一の店屋なのだろう。様々な地域のニーズにこたえているのだろう。

今まで走ってきたその道、終点にあったお店、そこからもっと向こうに行くと、走り始めたムーハウスの下の道に出るとい。そんな話があり、元気のいいランナーがそっちに行こうと声上がる。

多くの人がもと来た道を戻るとい。

私は、その元気の良い人たちを追いかける。そんなランナーの後に着いていった。ずいぶん山の奥の道だ、しばらくすると家畜の糞の匂いがする。鼻が曲がりそう。そんな表現がよく分かる。しかし、そこで働いている人がいる。

その家畜の糞を栄養にして、その野菜を食っている人がいる。

糞、それは普通汚いものにとらえる。人は食べ物を食べる。それが胃に行き、腸を通り、最終的に肛門から糞として出てくる。身体の中にあるときは何とも思わないのに、糞となると嫌な感じがする。

最近、私は、その糞を、身体から出てきた、その時に、よく見るようにしている。よく見ると昨日食べた食物の一部があったりする。トウモロコシの皮だったり。最近それを愛おしく思う。

萩田さんが言った。大便とは大きな便りと書く。と。

特別養護老人ホームさくまの里で介護の実習の時に水窪のオバーさんが言っていた。

「かつてにカーバレ日向クゾ」

その意味は、考えた。様々なことがあるけど最終的には行くところに落ち着く。そんな意味だろうと思った。コースは、それから下りになり、昔建てられたであろう別荘地帯を左に見て下って行った。そしてムーハウスの下の道に出てきた。

走るのが終わり。ムーハウスでシャワーを浴び、それから着替えをして昼食となる。それぞれ持ってきた弁当食べる。休憩をして午後から、よいよ修身教授の読書会だ。

縁あって集まったメンバーがそれぞれに修身教授録の本を机に置き待っている。あるものは、その本をネットで買った、と言っている。あるものは、その本の頁をめくって読んでいる。私は昨日少し読んだけど、大変難しい本だと思った。分からない漢字や言葉が多かった。そんな印象だった。

今回、それを集まって、一人ひとり声を出して読む。読書会、話しには聞いたことがあるが、今回は初めてのことであった。

最初は私からであった。推薦の言葉・事序と続く。事序とは「何かのついで」そこに、この本ができた経緯が書いてある。昭和の初め、先生の話す言葉を生徒に書かせ、今、その生徒が書いた文を私たち平成の年寄りが詠む。

萩田さんが始めた、森町三倉「勉強会」読書会が始まった

それは

第一部 修身教授録

第1講 学年の初めの挨拶

から始まった。そして

第2講 人間として生まれて

読み終わって、読んだ人で、その内容を感じたことを話しあった。そして一日目が終わった。

それを4年間続け、最後

第38講 置き土産

第39講 別れの言葉

で終わった。

そして萩田さんが言った。

「この本の中で、どの講が印象深かったですか」と。その萩田さんが印象に残った講は

第一部 修身教授録

第27講 成形の功德

「その言葉が私の心に残った」と言っていた。

成形の功德とは、物事を形にすることによって初めて現れる効果のこと。

だから萩田さんはマラニックを行った後、必ず最後の報告を言うと言う。

私が心に残ったのは

第10講 尚友

尚友その意味は、書物を読んで、その書物の作者や賢人を友とすること。

本をあまり読まない私は、この言葉で、なるべく多くの本に接し、その人の本を読み、その作者の考えを知ろうとした。

川島さんの書いた本も、その本人の話したこと、行動、その他を感じながら読んだ。その人は私より一回り年上の人だ。

「時が輝くとき」刹那とは。仏語、時間の最小単位。人生とは過ぎてしまえば、、、儚いものだ。速くても遅くても。走ってる人も、走っていない人も。若くても年老いても。其々の人生を輝くものに、その様に私は感じた。思った。

沢木耕太郎「深夜特急」の一説を思い出した。

インド、デリーからイギリス、ロンドンまでのバスでの一人旅、地中海を渡るフェリーの船先で酒を飲み「飛行よ飛行、汝に一杯の酒をすすめん」

この読書会、森町三倉「勉強会」が終わったのは、丁度コロナが世の中で騒ぎ出した頃だった。テレビでは安倍晋三首相が緊急事態宣言出した時だった。学校が休みになり。町から人は消えていった、そんな時だった。

私は、森町三倉の勉強会には行かないようになった。しかし、その勉強会は続けているようで、メールでフェイスブックで、そのお知らせが来る。

みんな頑張っているナ。しかし、私は、その勉強会には行かない。行くことが出来ない。それは家族がいるから。子どもは介護関係の仕事をしている。親である者として外出はひかえた方や良いのではと考えた。そんなとき私は本でネットでも多くの人の動画で触発されていた。

中村文昭さんの「お金ではなく人のご縁でデッカク生きろ」塩沼亮潤「人生生涯小僧のこころ」そんな著者もユーチューブでその人の話が聴ける。それはグロービスの動画から得た物が多かった。その動画の中に藤原和博さんの話もあった、その人がネットの寺子屋「朝礼だけの学校」を始めた、そんな話を聞き、迷った結果、森町三倉「勉強会」では修身教授録を読み終えたし、終わりにしようとして「朝礼だけの学校」に参加するようにした。そこではズームを使つての話す場を作ったりもしている。佐久間町という山奥でも、様々な人と交流ができる。様々な人の考えを知ることが出来る。と思った。

しかし、ヤッパリ。リアルに実際の人と会つての森町三倉「勉強会」一つの場所にみんなが集まつて時間を共有することの大切さを、こんな時期だからこそ大切なことだと感じた。

その森町三倉「勉強会」に参加している下さんという人がいる。浜松縦断、浜松から佐久間まで走って、川合にある伊藤さんの別宅で酒を飲む。そんな集まりと一緒に酒を飲んだことがある。

その人は私に言った。

「お宮の鳥居、それは何を意味としているか、分かりますか？」と

「・・・・・・・・」

「それは女の腿を表しているノダ」と

下さんは

「あれは神なのだ」と続いた。

この話は、タダの男同士でのスケベ話しでは終わらない。私より一回り年上の下さん。私のスケベ心に火を点した。

日本の古事記ではイザナギとイザナミの物語から始まる。その二人が日本の神をつくっていく、そして日本の国ができていく。そんな物語を考えた人がいる。人類が増え、その国は繁栄する。

下さんが言うように、あれを神という話が多い。そんなお祭りも日本の各地にある。実際に赤ちゃんが通る道を産道という。参道と字は違うけどただの偶然だとは思わない。

下さんが言うように、鳥居を潜り、参道（産道）を歩くこと。それはお宮の神さまに合う事とは、いわゆる自分が生まれ変わることに、なのだと思う。

その下さんが、私に、もっと前に話した言葉がある。

「こんなとこ、早く出て行った方が賢明だ、その方が奥さん喜ぶ」と（こんなとこは佐久間みたいな山奥）

そうかナ。と思った。そのときは。その話は十年ももつと前の話しである。佐久間町が浜松市に吸収合併したときである。

そんな、ことで自分のこれからを考え、森町三倉「勉強会」に参加したのも、そのことが私に引っかけたのである。萩田さんが言う、人間としての考え方、生き方、真理を伝えたい、「真理」とはいつどんなときにも変わることのない、正しい物事の筋道。

そして森信三先生の「修身教授録」を一緒に読んだ仲間だった。そして自分は「真理」それを自分は郷土愛を貫くとした。そして還暦になって自分史を書いた。そしてそれを森町三倉「勉強会」のみんなに配った。それを読んだ下さんは去年の天竜川リバーサイドで佐久間ダムのエイドで私に言った言葉

「こんなとこ、何をやっても良くなるない」

本当に、この人は森町三倉「勉強会」で何を学んだらうか？

「修身教授録」を読んで、何を感じてきたのだろうか？

分からない。そう思った。

私は、この勉強会で学んだことは、郷土愛。自分のやってきたことは、間違いでななかつた。そのように思った。

その下さんは、サクラさんという女の人を連れて来る。その二人の関係は、走る仲間は誰も詮索しない。佐久間に来て伊藤さんの別宅に泊まり。その下さんが実家で不幸があり、急遽、その実家の御岳まで帰ることになった。

その話があつて、他のみんなは次の日は、愛知県新城市で走る用事がある。

新居の坂井さんが、その日は家に帰るから、私が送って行こう。そういう話になった。

別に、それはそれでイイのではと思ったが。

ところが、その下さんが私に言った。

「サクラさんを坂井さんの車に乗せるわけにはいかない」と。

分からない、サクラさんと下さんの関係

私は、次の日、サクラさんは新城に行くから、と言ってウツチャンの車に乗せた。

そして、サクラさんは湯谷温泉駅から帰った。

70歳になっても、男と女、様々な人間関係がある。多くの複雑な人間関係を見てきた。

70歳代後半の、ある人が、女に手を出したとか。

私は60歳、そのぐらい良いのではないか、と思うのだが、人の感じ方はソレゾレ違う。

「こんなとこ、早く出て行った方が賢明だ、その方が奥さん喜ぶ」

その言葉は、私のことを思つての言葉だと思う。12歳年上の先輩としての助言なのだと思う。しかし、本当にそれでいいのかと思つた、当時の40歳代後半の自分がある。佐久間町が浜松市に合併したことは、ここからの佐久間町の発展することは無い。一目瞭然だ、そんな言葉が頭の中でくりかえす。

下座行、そんな講があつた。

第22講「下座行」

下座（しもぎ）それは下の身分ということ。それに「行」がつく。下座行（げざぎよう）下座（しもぎ）の行（おこない）とも読める。

本当は、今の立場より上の立場だと思ふのだが、下の立場で物を見る。その立場の時に己を磨く。

その下座行の講を読み終わり、萩田さんが言った。

「二橋さんは、その下座行を学生のときに経験した」と

二橋さんの話によると、学生時代、お寺に行き修行をしたそう。そのお寺の修行で下座行があつたと。

朝の托鉢、その持ち物はバケツに雑巾だという。それを持って、その信者の所により。便所を掃除させてもらう。そして掃除し終わったならば、その家には食事が用意されていると。そんな話であった。今から50年前の話です。と、その話が終わった。そして便所掃除の話。ヤマハを退職するとき、その便所を掃除した。今も家の便所掃除は自分の仕事、便所を掃除すると運が自分にやって来る。そんな話でした。

トイレの神様、そんな歌がある。トイレには綺麗な女神様がいます。

森町三倉「勉強会」森信三先生の「修身教授録」読書会  
良い経験になった。

